

部活動改革と心田開発 第二回

創部五年目、円形組織が真価を發揮し 齊藤 勇

ポテンシャル オブ 地域部活

令和五年三月四日、日本地域部活動文化部
推進本部（略称 ポッカ）主催、「子どもたち
のためのファミリーフェスタ」が、静岡県総
合教育センター講堂（掛川市）で初開催。

この催しは、開催地の公式キャラクター
「茶のみや きんじろう」が謎解きの冒険に
出発するというライブイベントで、東海道を
歩く途上、楽しく愉快なゲストたちと出会う
中、客席の来場者も参加しながら夢を現実に



2023年3月 ファミリーフェスタ
ステージの様子

していくプロセス
の一端を体験して
いく物語です。
もう一方で、こ
の催しは「ポテン
シャル オブ 地域
部活@あすなる二
〇二三」という位

置づけで開催。表舞台の楽しいパフォーマンスの裏、客席からは目に見えないところで潜在的な力が大いに發揮されました。

円形組織

日本初の文化系・地域部活動・掛川未来創造部パレットは、令和三年から報徳に根差す理念を掲げるポッカが主催運営しています。

パレットには、部長・副部長はいません。技術指導をする立場の顧問もいません。「円形組織」が大きな特徴です。トップダウンでもなく、ボトムアップでもない。表舞台も裏舞台もどちらも大事、レギ



2022年7月 部の紹介プレゼンで
円形組織を発表するパレット4期生

ユラーも補欠もなく、そこに優劣はありません。全員が価値ある存在で、ただ役割が異なるという考え方は。

昭和から続く伝統的な部活動の中には、令和になった今でも服従的な上下関係が内在しています。大人と子ども、または、子ども同士の関係性の中でパワハラ・暴力・暴言など痛ましく、悲しい事件が後を絶ちません。

共演者からの大絶賛の声

フェスタ当日、県内外から3人のプロのゲストが出演。茶のみや きんじろうの冒険の物語で共演の後、トークセッションでパレットの印象を尋ねたところ、「自分たちで率先して、どんどん動いていて驚いた。」（舞台裏でいろいろな役割があるが）「この舞台を中学生たちが作っていて、こんな部活ありますか？」と驚きと感動の連発していました。中学生たちの高い自主性と、受け身的ではない姿に強いインパクトを受けたようです。

午前のリハーサルから一緒に過ごし、刻々と時間が削られて本番が迫る中、ゲストの方々への対応も含め、中学生たちの行動や言

動を間近で見聞きしたことから自然と飛び出した驚嘆と感動の声でした。

表に出ない裏の活動の重要性

部活動に限らず、舞台上での結果で評価されるのが一般的です。文化部の大会では、舞台での表現力・技術力が評価の尺度になります。高い得点につながる技術的な指導を顧問や、専門の講師が担当、競技大会で高い評



2022年3月 リハーサル 舞台袖にて
ゲストと打合せをするパレット4期生

価を得るためには、優れた指導力を持った大人の専門家と、理論に裏打ちされた技術習得のための一定以上の練習時間と環境の確保が必要不可欠な要素です。

パレットでは、平日週二回、一回二時間の活動に限定。土日も年に二回程度しか活動しません。本番前の詰め込み練習も一切行いません。今回の台本は約2週間前、進行表は1週間前に配られ、わずかな時間で集中的に準備

当日も完全な通しリハーサルは行えない状況で本番を迎えました。次の場面がスムーズに進行できずに間が空くこと場面が数回発生。ただし、今回は、ポッカ主催のネット情報番組の公開収録として入場無料で開催。後日、配信時に修正して公開可能なため、トータルでカバーできる仕掛けになっています。



舞台袖で進行要の確認をしている
パレット4期生と5期生

表舞台以上に大事なことが裏舞台にあります。企画したものを制作、協議を重ねて情報共有、多方面の関係者に配慮しながら、感謝の念をもって応対。また、現場で急な変更が生じた時の冷静かつ、迅速な対応など。上手くいくこともあれば、失敗もあります。成功から失敗を引いた結果、楽しさや充実感が勝って、トータルでプラスになれば幸せなことです。

ノミスを追求、ミスを糾弾し、自己を否定していたら、変化のスピードが速い予測不

能な未来の社会で、どうやって生きていくのでしょうか。変化に備えながら、求められる資質や能力、心の姿勢は何でしょうか。

大人が描いた設計図をベースに、その監督・指揮のもと、長時間かけて練習したことをミスなく再現することに対して、過度に高く評価・称賛する部活動の在り方に、今回の活動は、新たな視点を投げかけています。

主体的な活動のすべては心田開発

ポッカでは円形組織を、報徳の円融合につながる実践例の一つと捉えています。

ところが、ポッカ創立後に円形組織を導入した訳ではありません。パレット内部で円形組織の考え方は、創部初年度から既にありました。長年にわたる試行錯誤、部員たちの奮闘の積み重ねがあり、創部五年目にして、その真価を発揮するに至ったと感じています。自分事として捉える主体的な活動のすべては心田開発そのものである考えます。

今回、現場のレポートが中心になりました。次回は、報徳の思想をベースに更に深掘していききたいと思います。